（8 月 30 日）「ルカによる福音書 13：31～35」
エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。
（ルカによる福音書 13 章 34 節）

・ルカによる福音書とその続編である使徒言行録には、エルサレムに関する多くの記述が見られます。エルサレムはユダヤの人たちにとって、とても大切な場所でした。
・過越祭などの大きな祭りのときには、ユダヤ人の成人男子は神殿に行き、礼拝をしていました。また宗教の中心地でもあり、救いはここから広がっていくと思われていました。
・しかしファリサイ派やサドカイ派、律法学者といった宗教指導者たちは、イエス様やその前の預言者たちを受け入れることができませんでした。神さまの思いを理解できなかったのです。わたしたちの教会はイエス様に嘆かれてはいないでしょうか。

（8 月 31 日）「ルカによる福音書 14：1～6」
そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」
（ルカによる福音書 14 章 3 節）

・聖書には、ルカによる福音書にしか載せられていない安息日のいやし物語があります。「安息日に、腰の曲がった婦人をいやす（13：10～17）」や「安息日に水腫の人をいやす（14：1～6）」がそうです。
・イエス様の十字架の後、ユダヤ人以外の人々（異邦人）にキリスト教が伝えられていく中で、ユダヤ人は異邦人に対し、割礼をすることや安息日などの律法を遵守することを求めようとしていきました。ルカ福音書はその異邦人に向けて書かれています。
・イエス様はその活動の中で、安息日とは何かを語っていました。すべての戒めは人を生かすためのものであって、人を縛ったり、苦しめたりするものではないのです。それが異邦人やわたしたちに向けて語られたメッセージなのです。

福　音　書　通　読

8 月

（8 月　1 日）「ルカによる福音書 8：40～56」
ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。　（ルカによる福音書 8 章 43 節）

・今日はこの「12 年間出血の止まらない女性」（長血の女と呼ばれることもあります）にスポットを当てたいと思います。血が止まらないことは不浄であること、つまり宗教的に汚れていることを示します。会堂にも入れず、社会からも阻害されていたでしょう。
・彼女は会堂長ヤイロと共に歩くイエス様の姿を見ます。その様子から、何か大変なことが起こったのではないかと想像はしたでしょう。また周りにいる群衆も、彼女とイエス様とを分け隔てていました。
・しかし彼女は、イエス様の服の房に触れました。イエス様にすがるしかない彼女は、たった一人でイエス様のそばに行き、憐れみを求めました。その彼女の心にイエス様は気づき、足を止めたのです。イエス様はそのような一人にも、目を向けられるのです。

（8 月　2 日）「ルカによる福音書 9：1～9」

次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。

（ルカによる福音書 9 章 3 節）

・わたしたちは様々なことをおこなう前に、「計画」を立てます。資金は足りるのか、広報手段はどうするのか、不測の事態が起こったときには誰がどのように対処するのか。そのために準備をすることが大事なことだと考えるのです。

・しかしイエス様は 12 人に対し、何も持たないように命じました。野獣を追い払う杖も、施しを受けるための袋も、食料もお金も、夜の寒さから身を守る二枚目の下着も持たせてはくれませんでした。

・それは、神さまが共にいて守り、導いてくださることを 12 人に知らせるためだったのでしょう。お金がないから宣教ができない。人が足りないから福音が伝えられない。それは言い訳に過ぎないのです。

（8 月　3 日）「ルカによる福音書 9：10～20」

すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。

（ルカによる福音書 9 章 16 節）

・昨日の箇所で派遣された 12 人の使徒たちは、イエス様の元に帰って来て報告します。彼らは何も持たずに出かけましたが、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやしたと書かれています。

・ベトサイダに退いた彼らを追って、群衆はやって来ます。イエス様はここでも教え、癒します。そして群衆を解散させるように言ってきた 12 人に対し、「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」と命じられます。

・何も持たず、神さまに全てを委ねて宣教に出かけた 12 人でしたが、実際にパンと魚を手にするまでは 5000 人が満腹するとは思えませんでした。しかしイエス様はすべての人を満腹させる奇跡の業に、12 人を巻き込んでいくのです。

（8 月 28 日）「ルカによる福音書 13：18～21」

また言われた。「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

（ルカによる福音書 13 章 20～21 節）

・今年 3 年ぶりに、滋賀県の北小松で「教会ファミリーキャンプ」をおこないました。人数もさほど多くはなくこじんまりとしていましたが、天候にも恵まれ、ゆったりと過ごすことができました。

・日曜日の朝、愛さん式をおこないました。いつも礼拝で使用するウェハースではなく、焼き立てのパンを準備しました。水、強力粉、バター、砂糖、塩、スキムミルクをそれぞれ入れた後、真ん中のところに穴をあけてそこにベーキングパウダー（パン種）を入れました。

・ふかふかの焼き立てパンを、みんなで分かち合いました。わたしたちの心の中にも、温かいものが膨れ、満たされているような気持ちになりました。「神の国」とは、そういうものかもしれませんね。

（8 月 29 日）「ルカによる福音書 13：22～30」

狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。

（ルカによる福音書 13 章 24 節）

・エルサレムに向かうイエス様に対し、一人の人が尋ねます。「救われる者は少ないのでしょうか」と。多ければ自分も選ばれると思ったのでしょうか。少なかったとしてもエルサレムに従う自分は選ばれるはずと思っていたのでしょうか。

・しかしイエス様は、救われる人の数には触れずに、狭い門から入るようにと促されます。狭い門さえ選べば、門が閉まる前であればすべての人が救いに導かれるとイエス様は言われています。

・ただし狭い門から入るには、自分の周りにあるあらゆるものから手を離す必要があります。すべてを握りしめたままでは無理です。すべてのものを神さまに帰し、神さまに委ねて狭い門を目指しましょう。

（8 月 26 日）「ルカによる福音書 12：57～13：5」
決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。（ルカによる福音書 13 章 5 節）

・ルカ福音書には、「悔い改め」という言葉が多くみられます。それはこの福音書が「異邦人」と呼ばれるユダヤ人以外の人に対して書かれたためです。ずっと神さまの愛に気づかずに生きてきた人に向けて書かれた、だからわたしたちに対するメッセージでもあるのです。
・そもそも「悔い改め」とは、単なる反省や後悔とは違います。ダイナミックな方向転換です。神さまに背を向けて歩いていたけれども、ある日、180 度方向転換して神さまの方に向き直るということです。
・キリスト教とは、道徳的・倫理的にちょっと良い人になるための教えではないのです。あなたの生き方を 180 度変えるイエス様との出会いなのです。わたしたちは自分の力で生きているのか、それとも神さまに生かされているのでしょうか。あなたはどちらを選びますか。

（8 月 27 日）「ルカによる福音書 13：6～17」
園丁は答えた。「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。」
（ルカによる福音書 13 章 8 節）

・聖書の中でイスラエルの人々は、ぶどうやいちじくにたとえられることがあります。人々が神さまに喜ばれるようになることを「豊かな実をつける」と言いますが、そうでない場合は「斧は木の根元に置かれる」というのです。
・今日の箇所のたとえの中で、主人は園丁に、いちじくの木を切り倒してしまえと命じます。ところが園丁は、木の周りを掘って肥やしをやるので、そのままにして欲しいと願います。この園丁は、わたしたちが実を結ぶのを辛抱強く待ち続けるイエス様の姿です。
・次の年、いちじくの木が実を結ばなかったら、どうなるのでしょう。「去年約束しただろう。もう無理だ。切り倒してしまえ」という主人に対し、同じやり取りがなされるように思うのは、わたしだけでしょうか。

（8 月　4 日）「ルカによる福音書 9：21～27」
それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」
（ルカによる福音書 9 章 23 節）

・イエス様に従うためには、自分を捨てないといけない。そう聞くとわたしたちは、イエス様に従うことってすごく大変なことだなと感じてしまいます。この「自分を捨て」とは、どういうことなのでしょう。
・「自分を捨て」という言葉を原文どおりに訳すと、「自分自身を否定する」となります。しかしそれは決して自分をないがしろにしたり、自分の命を軽んじたりということではありません。
・神さまとの関係の中で、自分の立ち位置を定めなさいということなのだと思います。神さまの前に、わたしたちは自己主張ばかりしていないだろうか。自分の利益ばかりを追い求めていないだろうか。そのように「日々」考えること、それが必要なのでしょう。

（8 月　5 日）「ルカによる福音書 9：28～36」
すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。（ルカによる福音書 9 章 35 節）

・ペトロたち三人が目にした光景は、まさに神の国の先取りといえるものでした。モーセ、そしてエリヤと語るイエス様の服は白く光り輝き、そして栄光に包まれていました。
・しかしイエス様たちがエルサレムでの最後のことを話している大事な時に、弟子たちは眠りこけてしまいます。一番大事なところを聞き逃してしまった、そういう意味なのかもしれません。そしてペトロは幕屋を三つ建てる提案をします。
・幕屋を建てることは、その栄光を自分たちの元に留まらせるということです。しかしイエス様はすべての人のために十字架につけられるために、山を下ります。わたしたちの教会はどうでしょう。イエス様の栄光を自分たちだけのものと勘違いしてはいないでしょうか。

（8 月　6 日）「ルカによる福音書 9：37～45」
イエスはお答えになった。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。あなたの子供をここに連れて来なさい。」
（ルカによる福音書 9 章 41 節）

・山上でのイエス様の変容の記事に続いて、マタイ・マルコ福音書と同じようにルカ福音書は、残された 9 人の弟子たちが悪霊を追い出すことができなかったという物語を報告します。
・マタイ・マルコでは「からし種の信仰」、「祈りによらなければ」とイエス様は弟子たちに教えました。ルカではイエス様が「なんと不信仰で、ゆがんだ時代なのか」と嘆く場面しか書かれていません。この嘆きは、わたしたちにも向けられているのではないでしょうか。
・続いてイエス様は、二度目の受難予告をされます。弟子たちにはその意味が分かりませんでしたが、怖くてイエス様にその意味を聞くことができませんでした。彼らは何を恐れていたのでしょうか。真実から目を逸らそうとする彼らの姿に、あなたは何を見ますか。

（8 月　7 日）「ルカによる福音書 9：46～50」
イエスは言われた。「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである。」（ルカによる福音書 9 章 50 節）

・イエス様の二度目の受難予告の後に、弟子たちは「誰が一番偉いか」という議論を交わします。イエス様の受難の意味を聞くことすら怖がっていた彼らがです。しかしわたしたちの教会の中にも、序列やランク付けなどは存在しないでしょうか。
・イエス様はそうではなく、「子どもを受け入れる者がわたしを受け入れる」と言われます。それも「わたしの名のために」と。イエス様の愛をすべての人に知らせるため、当時数にも数えられなかった子どものような小さくされた人と共に歩む。それが教会の使命です。
・わたしたちの教会は、閉鎖的であってはなりません。自分たちに従わないから敵なのではなく、逆らわない人は味方として受け入れなさいという言葉を、教会でも実践していきましょう。

（8 月 24 日）「ルカによる福音書 12：35～48」
主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。（ルカによる福音書 12 章 37 節）

・夜中に地震の揺れを感じ、ビックリして飛び起きたことがあります。1995 年 1 月 17 日に起こった阪神淡路大震災は午前 5 時 46 分に、2016 年 4 月 16 日に本震があった熊本地震は午前 1 時 25 分に起こりました。
・あらかじめその地震が来ることが分かっていたなら、十分な備えをし、目を覚ましていたことでしょう。しかし残念ながら、わたしたちにはその“時”が分かりません。
・だからといって、何も備えずにいるのでしょうか。ずっと目を覚ましておくことはできないでしょう。しかし今、自分にできる準備をしておくことが大切です。イエス様の再臨への備えについても、同じことなのです。

（8 月 25 日）「ルカによる福音書 12：49～56」
あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。
（ルカによる福音書 12 章 51 節）

・今日の箇所だけを見ると、イエス様は平和を願っておられないかのように感じます。しかしここで言われる平和とは何なのか、わたしたちは考える必要があるのかもしれません。
・当時の人たちは、自分たちさえよければと自分たちとは異なる人たちを遠ざけていました。民族、宗教、職業、そして律法を守っているかどうか、そのようなことで自分たちとは違う人たちを排除していきました。
・それを彼らは「平和」と呼ぶわけです。今のわたしたちの世界も一緒です。自分たちとは違う考えを受け入れず、自分たちに従うように迫る。それは「平和」ではないのです。イエス様はそんな自分勝手な「平和」を打ち壊し、本当の「平和」に導こうとされているのです。

（8 月 22 日）「ルカによる福音書 12：13～21」
自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。
（ルカによる福音書 12 章 21 節）

・イエス様に対して「兄弟に遺産を分けるように言ってほしい」と訴える人。彼は果たして貪欲でしょうか。次男や三男にとって、ただでさえ長男よりも分け前の少ない遺産をもらえないことは死活問題でした。
・また豊作だった年に、穀物や財産を倉にしまい備えようとした金持ちは、貪欲でしょうか。彼が貪欲であれば、老後や子どものために貯蓄することも、貪欲なのでしょうか。
・日本語の聖書では分かりにくいのですが、金持ちの男は、「わたしの穀物」「わたしの財産」「わたしの倉」と言い、「わたしの魂」に「楽しめ」と語っています。神さまからの恵みを「自分のもの」だと勘違いすること。そのことが「愚か」なのだと思います。

（8 月 23 日）「ルカによる福音書 12：22～34」
ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。
（ルカによる福音書 12 章 31 節）

・「ケセラセラ」という曲が 1950 年代に発表されました。日本でもペギー葉山や雪村いづみによってカバーされ、ヒットしたそうです。「ケセラセラ」とはスペイン語で、「なるようになる(Whatever will be, will be)」という意味だそうです。
・「なるようになる」というと、何だかやる気のない、投げやりのようなイメージを持ってしまいますが、聖書の中の「なるようになる」はそうではありません。「思い悩まずに、信じる」ということです。
・神さまがわたしの心に手を差し伸べてくださいますように。この祈りこそが、「神の国を求める」ということだと思います。そのことで、「すべての物は与えられる」のです。（聖歌 483 番、増補版の歌詞の方が好きだったなあ…）

（8 月　8 日）「ルカによる福音書 9：51～56」
イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。
（ルカによる福音書 9 章 51 節）

・ルカによる福音書は、ここから新たな展開を迎えます。新共同訳では「天に上げられる時期が近づくと」と訳されていた言葉が、聖書協会共同訳では「天に上げられる日が満ちたので」となっています。「チャージ完了」といったイメージでしょうか。
・しかしエルサレムに向かうにあたり、イエス様が使いの者を送った場所は、当時の常識からするとふさわしくない場所でした。ユダヤ人とサマリア人は憎み合っていたからです。事実、イエス様は歓迎されませんでした。
・わたしたちも福音を宣べ伝えているのに、邪魔をされたと感じることもあるでしょう。そしてヤコブやヨハネと同じように、怒りを燃やすかもしれません。しかしそれは、イエス様の思いとは異なるのです。イエス様はすべての人を救いに導くために来られました。

（8 月　9 日）「ルカによる福音書 9：57～62」
一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。
（ルカによる福音書 9 章 57 節）

・エルサレムに向かって歩みを進めるイエス様は、「弟子の覚悟」を語られます。「わたしには安らぐ場所はない」、「父の葬りより宣教を優先させなさい」、「家の者に別れを告げることはない」。言い方は違いますが、このように捉えることができます。
・この言葉を聞いて、背筋がゾ～っとするのはわたしだけでしょうか。イエス様も大事だけれども家族も大事。その気持ちはイエス様の弟子として、ふさわしくないのでしょうか。
・それともイエス様は、あらゆる言い訳を胸に、イエス様からの招きを回避しようとするわたしたちの心を見透かされているのでしょうか。弟子とは何なのか、考えていきたいと思います。

（8 月 10 日）「ルカによる福音書 10：1～12」
その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。（ルカによる福音書 10 章 1 節）

・昨日の箇所でイエス様は、「弟子の覚悟」を語られました。その直後に、イエス様が 72 人を派遣された記事が記されます。72 という数字は、この当時考えられていた世界の民族の数だそうです。
・そのことから、この 72 人の派遣は全世界への宣教と考えることが多いです。しかしもう一つの側面にも目を向けたいと思います。それは、「72 人も選ぶのは大変だったんじゃないの」ということです。
・宣教に遣わすのですから、その人の資質や能力を見極めたいところです。数人ならばそれも可能でしょう。でも 72 人となれば…。イエス様は手当たり次第、誰でもいいから選んだのではないでしょうか。イエス様の呼びかけに「はい、行きます」、それだけでいいのです。

（8 月 11 日）「ルカによる福音書 10：13～20」
あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである。（ルカによる福音書 10 章 16 節）

・72 人を派遣して帰ってくるまでの間、イエス様は悔い改めない町を叱ります。「町を叱る」とはどういうことなのか、ちょっと想像がつきませんが、イエス様は後にエルサレムのために嘆いてもおられます。
・聖書の記述は、神さまとイスラエルの民とが契約をしたことを前提に進んでいきます。しかしイエス様は一つの民族のためだけではなく、全世界へと宣教の場を広げていかれました。神さまの愛がすべての人に伝えられていくのです。
・わたしたちに求められているのは、町単位、民族単位の決断ではありません。「あなたはどうするか」ということです。一人ひとりがイエス様を心に迎え入れることが必要なのです。

（8 月 20 日）「ルカによる福音書 12：1～7」
それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。
（ルカによる福音書 12 章 7 節）

・偽善という言葉は、「うわべをいかにも善人らしく見せかけること。また、そういう行為」という意味だそうです。パン種は小麦粉の中に入るとどこにあるかわからなくなりますが、熱を加えると驚くほど周りを大きく膨れさせます。
・ファリサイ派の人も見た目には神さまの前に正しい者のように思えますが、人々に様々な悪い影響を与えてしまうということでしょうか。
・そしてイエス様は、神さまを恐れなさいと言われます。この言葉はとても怖く聞こえますが、「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられる」神さまの姿も同時に示されます。神さまはわたしたちのことを、わたしたち以上に知ってくださっているのです。その神さまの愛を知ったわたしたちは、他に何を恐れることがあるでしょうか。

（8 月 21 日）「ルカによる福音書 12：8～12」
人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない。（ルカによる福音書 12 章 10 節）

・キリスト教では、「父」「子」「聖霊」という三位一体の神を信じています。この教理は、3～4 世紀におこなわれた公会議によって定められ、聖公会ではそれを教会の信仰として受け入れています。「ニケヤ信経」を礼拝の中で唱えるのはそのためです。
・しかし、父である神さま、子であるイエス様に比べ、「聖霊」の存在は、わたしたちにとって理解しにくいものなのかもしれません。というのもその姿や形状など、イメージしにくいからです。
・天地創造のとき、神さまは人の鼻に息を吹き入れて生きる者とされました。「息」と「霊」とは、聖書の原語では同じ言葉が使われています。わたしたち一人ひとりに与えられた「神の息」が「聖霊」として、わたしたちを導き、生かしてくれるのです。

（8 月 18 日）「ルカによる福音書 11：29～36」
群衆の数がますます増えてきたので、イエスは話し始められた。「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。（ルカによる福音書 11 章 29 節）

・旧約聖書には様々な物語が収められています。ダビデの子であるソロモン王は神さまに知恵を求め、栄華を極めます。彼の元を訪ねたシェバの女王はソロモンの知恵と彼の建てた宮殿に目を見張ります。（列王記上 10 章に詳しく書かれています）
・またヨナ書には、ニネベの町に対し悔い改めを呼びかけるように命じた神さまを無視し逃亡したヨナが、魚の腹の中に三日三晩いた物語が載せられています。とても短く面白いので、一度お読みになってください。
・女王はソロモンを、そしてニネベの人々はヨナの言葉を信じました。ところがそれに優るイエス様の言葉を信じないのはどういうことなのでしょうか。目に見える財産や不思議な出来事がないと信じられない、というのは信仰ではないのです。

（8 月 19 日）「ルカによる福音書 11：37～54」
イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。
（ルカによる福音書 11 章 37 節）

・イエス様がファリサイ派の人から食事の接待を受けたという記事は、わたしたちには奇妙に映るかもしれません。というのもファリサイ派はイエス様の教えを受け入れることができなかったからです。現に今日の箇所でも彼らはイエス様から非難されています。
・ファリサイ派の人がイエス様を食事に誘った理由はただ一つ、見栄のためでした。イエス様は会堂などで人々に教える教師という一面も持っていました。安息日にそのような人を家に招くことは、自分のステータスを上げることだと考えられていたのです。
・外側ばかり気にするファリサイ派の人は、食事の前に身を清めないことを驚き、会堂では上席に座ることや広場で挨拶することを好みます。すべて「人の目にどう映るか」ということです。わたしたちもファリサイ派のようになってはいないでしょうか。

（8 月 12 日）「ルカによる福音書 10：21～24」
それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ。」（ルカによる福音書 10 章 23 節）

・子どもの頃何か良いことをしたときに、先生や親から思いっきり褒められて、とてもうれしかった思い出があります。人間だれしも、褒められればうれしいし、逆に叱られると落ち込んでしまいます。
・72 人が帰って来たとき、イエス様は聖霊によって喜びにあふれたと書かれています。72 人の働きを喜ばれた。それも天に届くほどの勢いで、賛美と祈りが届けられたということなのです。
・わたしたちの小さな働きも、イエス様はこのように喜んでくださっているのだと思います。わたしたちは幼子のように、神さまの愛なしでは生きていけない存在です。しかしその一人ひとりを喜びを持って用いてくださる方がおられるということを、覚えておきましょう。

（8 月 13 日）「ルカによる福音書 10：25～37」
律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカによる福音書 10 章 37 節）

・「わたしの隣人とは誰ですか」、この律法の専門家の質問には、自分の愛の対象者を限定したいという思いがあるようです。ユダヤ人は自分たちの「聖(きよ)さ」を守るために、罪人、徴税人、娼婦、そしてサマリア人などとは一切交際しませんでした。
・しかしイエス様が語られた「善きサマリア人」の物語では、強盗に襲われたユダヤ人に手を差し伸べたのは、神殿で礼拝を司る祭司やレビ人ではありませんでした。普段から敵対し、憎み合っていたはずのサマリア人が介抱し、彼の隣人になったのです。
・イエス様は、「行って、あなたも同じようにしなさい」と命じられます。思い浮かべてみましょう。あなたが普段関わりたくない人。避けたい人。考えが全く違う人。嫌いな人。消えて欲しい人、そのような人たちを、隣人として受け入れることができますか。

（8 月 14 日）「ルカによる福音書 10：38～42」
主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。（ルカによる福音書 10 章 41 節）

・「マリアとマルタ」の物語が読まれると、教会では「わたしはマルタタイプ」、「あの人はマリアタイプ」といった会話が聞かれることがあります。そしてたいていの場合、「マルタタイプ」と言われた人は、肩身が狭いようです。
・イエス様はマルタに対し、「マルタ、マルタ」と呼びかけます。名前を二度繰り返すのは、親しみをあらわします。イエス様はマルタを非難しているのではなく、たしなめているのです。「マリアの選んだことについて、あなたが考える必要はないよ」。
・教会には、マルタさんが必要です。人がそれぞれ、自分の置かれた場所で、自分のできることをする。これがないと、共同体は活性化しません。しかし人のことはどうでもよいのです。あなたが、あなたにあたえられたことをする。それだけなのです。

（8 月 15 日）「ルカによる福音書 11：1～13」
しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。（ルカによる福音書 11 章 8 節）

・イエス様は「祈りを教えてください」と願う弟子に対し、一つのお祈りを教えられます。このお祈りは「主の祈り」として、世界中で最も祈られているお祈りです。しかしイエス様は、そのお祈りをただ唱えるのではなく、どのように祈るかもたとえを使って示されました。
・真夜中に友達のところに行って「パンを貸してください」と頼んでも、最初は戸を開けてもらえないだろう。でも何度も何度も、執拗に頼めば、きっと友達はその扉を開けてくれるに違いない。お祈りもそういうものだとイエス様は語られます。
・ただここで、心に留めておきたいことがあります。この執拗に戸を叩いた人は、自分のために願ったのではありません。旅の途中でお腹を空かせた友達のために、願っています。わたしたちのお祈りも「誰かのため」に、執拗に願うことができればと思います。

（8 月 16 日）「ルカによる福音書 11：14～23」
あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。（ルカによる福音書 11 章 18 節）

・昔、かなり気持ち悪い映画を見たことがあります。悪魔が大量のハエを使って人を襲うのですが、ハエは人の体をついばみ、あっという間に白骨化していくというものでした。ハエって肉食だっけ？とは思いましたが。
・聖書に出てくる悪霊の頭ベルゼブルは、「ハエの王」だそうです。仮面ライダーの怪人に出てきそうです。そう考えると、イエス様が本当にそのベルゼブルの仲間だとしたら、かなりショックです。
・結局イエス様の力を信じない人は、あれやこれやと理由をつけるのです。イエス様は悪霊の頭の力を使ってわたしたちを惑わそうとしているのでしょうか。それともわたしたちの間に神の国を来させるために、神さまの力を使っておられるのでしょうか。

（8 月 17 日）「ルカによる福音書 11：24～28」
イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」（ルカによる福音書 11 章 27 節）

・クリスマスを迎える前、アドベントに入ると、こういう話を子どもたちにすることがあります。「さあもうすぐクリスマス、イエス様がみんなのお心にも来てくださいますよ。それまでにお心をきれいに掃除しましょうね」。
・ところが今日のイエス様の言葉を聞くと、下手に心をきれいにすると悪霊がどんどん入って来てしまうような、間違った印象を受けてしまいます。ただ単に心を清めるのではなく、心を神さまに委ねていくことが大切なのです。
・そして一人の女性が声を張り上げ、イエス様の母マリアをほめました。イエス様を育て上げたことが素晴らしいというのでしょうか。しかしイエス様は、神の家族とは神の言葉に聞き、それを守る人たちだと言われます。ではわたしたちはどうでしょう。聞き、守っていますか。